道徳のまち笠松の
ささえ合い通信 No.10 「芭蕉踊」と共に引き継がれる郷土愛

芭蕉踊は50年ほど途絶えていましたが、昭和48年に再現されました。そして平成元年に県重要無形民俗文化財に指定され、その後、保存会によって大切に継承されています。毎年8月になると保存会の方々が踊りに使う道具や衣装などを準備し、芭蕉踊に備えます。そして円城寺地区の小学校4年生以上の子どもたちに、芭蕉踊の笛や踊りを親切に手ほどきします。最初はうまくできない子どもたちですが、指導を受けることによって笛や踊りを身に付けていきます。うまくできなかった子も、指導される方々の温かさや励ましによって、困難を乗り越えて上手になっていきます。

練習中のふれあいによって、地域の方々と子どもたちの間には、世代を越えた人間的なつながりも生まれています。

円城寺秋葉神社の提灯にあかりが灯るころ、太鼓のリズムに合わせて子どもたちが踊り始め、祭りムードが高まってきます。

こうした地域の体験は、大人になっても永く心に残り、故郷を愛し大切にする気持ちが育まれることでしょう。そして大人になっても芭蕉踊の太鼓や笛の音、鉦や掛け声を聴くたびに「ふるさと」の大切さを心に刻むことでしょう。

毎年8月22日に秋葉神社で芭蕉踊を行います

かさまつの民話「昔ばなし」 うどんの日①

「かあちゃん、川へ行ってくるぜ。」

「あかんあかん。まんだうどんの日がこんやろ。」

「となりの源さも川へ行ったもん。」

「源さは大人やでええわ。おまえは子どもじゃないか。いま行ってみい、ちゃんとノコをひかれて死んでまうに。」

七月にはいってもう五日もたつのに、長梅雨とみえて、むし暑い日が続いている。ここ米野のあたりは、田植えも終り、緑の田がひろびろとひろがっていた。

母は畑仕事から帰ったばかりで、汗びっしょりだった。

弥一はこれまで、親にないしょで木曽川へ行ったことはなかった。川へ行ったかどうかは、足の裏を見られるとすぐわかってしまうからである。木曽川は砂地で、川遊びをすると、どんなにあかのついたきたない足でも、砂ですりとられて、まっ白なきれいな足になってしまうのだ。

弥一もそのことはよく知っていた。

「土左衛門があがったぞ！」

堤防の方から大人たちの、人をよぶさけび声が聞こえた。弥一はその方へかけ出していった。

おおぜいの村人が土左衛門のまわりで、がやがや騒いでいた。川の方を指さしている者や、だまって腕組をしている者もいた。（つづく）